

# 特別支援教育の視点に立った小学校の通常の学級における授業の改善

所属校：杉並区立杉並第七小学校  
氏名：河本 明彦  
派遣先：帝京大学教職大学院

キーワード：通常の学級・個別指導計画・授業改善

## I 研究の目的

平成 21 年度の文部科学省の調査によると、平成 21 年 9 月現在、全公立小学校の 85.8%で個別指導計画が作成され、実施されているとのことである。しかし、この数値のうち、特別支援学級や通級指導教室（東京都では通級指導学級）に通わず通常の学級のみ在籍している児童の個別指導計画作成の割合は、明らかでない。おそらく、通常の学級では、これから計画を作成、またはこれから計画に基づいて授業を改善していくという段階であると推測される。

そこで、本研究では、通常の学級のみ在籍する児童を対象として、個別指導計画を基に授業を行うことを通して、通常の学級における授業をどのように改善したらよいかについて明らかにする。なお、研究の視点は次のとおりとする。1 個別指導計画に基づいた指導を行うことで、通常の学級の児童の困難や制約を改善、克服できるのではないか。2 個別の支援は、学習集団全体により影響があるのではないか。3 特別支援教育の視点に立った小学校の通常の学級における授業とは、どのような授業か。

## II 研究の方法と結果

### 1 児童の実態把握

#### (1) 対象

都内公立A小学校第4学年B児童を対象とする。本児童は、学習への集中困難が課題とされている。なお、この児童は医学的、心理学的な診断は受けていない。また、校内の組織的対応は研究当時行われていない。

#### (2) 方法

- ① 平成 22 年 8 月 30 日から 10 月 6 日までの計 14 日間、各教科等や休憩時間、給食時間における、B児童の学習面、行動・生活面、対人関係・コミュニケーション面、運動面の観察を行う。
- ② C市教育委員会が作成した「学習チェックリスト」と「行動チェックリスト」を利用して、担任と専科教員 2 名の計 3 名を対象に聞き取りを行う。
- ③ 校内生活指導全体会に参加し、より多くの教師が見取っている B 児童の実態を把握する。

### (3) 結果

- ① 学習面では、授業中すすんで発言し意欲的な姿勢が見られた。著しい遅れは認められないが、文章表現や算数科において論理的思考に困難が見られた。行動・生活面では、授業中、大声を出したり、離席したりする場面や、物音に反応して学習に関係のない言葉を発したり、視界に入った学習用具を使って遊んだりする場面が見られた。また、授業開始時に気持ちの切り替えに時間がかかったり、予定の変更があると不安になったりした。対人関係・コミュニケーション面では、友人関係は良好である。しかし、相手に合わせた適切な言葉遣いや異性の友達に対する表現に課題がある。運動面では、粗大運動、微細運動ともに良好である。
- ② 担任による学習面得点（分類内の平均）は、次のとおりであった（すべて 4 点満点）。聞く、話す、読む、計算は満点であった。書くは平均 3.5 点、推論は平均 3.8 点であった。3 名の教師による行動面平均得点は、次のとおりであった（すべて 4 点満点）。社会性 2.3 点、コミュニケーション 2.8 点、感情コントロール 1.5 点、多動 2.0 点、注意 2.6 点、衝動性 2.6 点、運動面 4 点であった。
- ③ 校内生活指導全体会では、学習態度、対人関係、気持ちのコントロールの 3 点が話題になった。

### (4) 児童の実態の評価

B 児童の課題は、次の 4 点である。①感情のコントロール、②多動性、③注意集中困難、④表現・対人行動。また、B 児童のよさは、次の 4 点である。①評価に敏感・好評価を意欲に変えられる、②積極性・積極的な発言、③事前の指示を守る、④時間を守る。

## 2 個別指導計画の作成

### (1) 方法

文部科学省策定のガイドラインを参考に作成する。座学の授業において課題が多く見られる B 児童の実態に合わせて作成する。

### (2) 結果

- ① B 児童に対する具体的な働きかけや支援は次のとおりである。ア 気持ちの切り替え、イ 刺激の

調整、ウ 活躍の機会、エ 好評価、オ 見通し、カ 課題解決後についての指示、キ 友達の考え方のよさを伝え参考にするよう指示。

- ② 学習集団の中でB児童の指導を行うので、集団全体への指導も次のように計画した。ア 発表順の工夫、イ 授業の見通し、ウ 時間の見通し、エ 択一の問い、オ 手順の明示、カ ノート指導、キ 同じ形式の板書、クノート転記を意識した計画的板書。

### 3 授業実践

#### (1) 方法

2で作成した個別指導計画を基に授業を行う。B児童が所属する算数科少人数D学習集団(全15名)において、平成22年10月18日から25日までの全8時間、算数科1単元分を筆者が指導する。

#### (2) 結果

- ① 第1時と第8時(最終)におけるB児童の集中を欠いた行動と積極的行動の出現回数を5分ごとに計測した結果は図1と図2のとおりである。

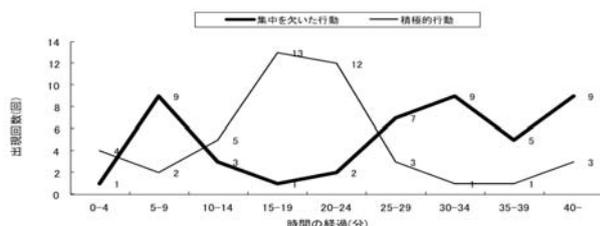


図1：第1時の出現回数

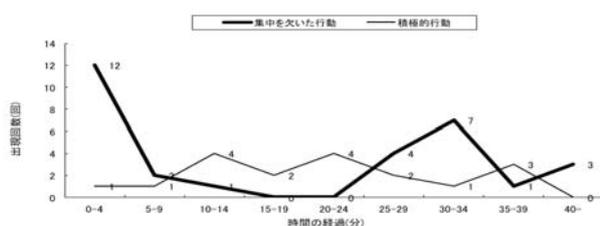


図2：第8時の出現回数

第1時に比べ、第8時はB児童が集中して学習できたと言える。その理由は次のとおりである。集中を欠いた行動の頻度の平均が4.9回から3.3回に減少した。また、積極的行動の頻度が安定した(第1時は13回から1回と幅が大きい、第8時は4回から0回までで推移)。そして、授業開始後35分以降の集中を欠いた行動が少なかった。

- ② 総括的評価の結果(B児童の得点(D学習集団の平均得点))は次のとおりである。数学的な考え方は100(89.2(SD=18.59))、数量や図形についての表現・処理は90(87.7(SD=11.2))、数量や図形についての知識・理解は100(86.2(SD=9.18))

であった。

- ③ B児童による授業評価の結果は次のとおりである。「授業の分かりやすさ」は「まあまあ」、「学習の楽しさ」は「だんだん楽しくなった」、「友達の考えが参考になった」は「参考になった。」であった。

また、全児童による授業評価の結果は次のとおりである。「授業の分かりやすさ」の肯定的評価は100%、「学習の楽しさ」の肯定的評価は93%、「友達の考えが参考になった」の肯定的評価は100%であった。

### III 考察

通常の学級において、個別指導計画に基づいた指導は効果があるという結果が得られた。また、個への働きかけの多い指導や支援は、学習集団全体に波及効果があるという結果も得られた。これらより、特別支援教育の視点に立った小学校の通常の学級における授業とは、次のような授業と考えられる。

#### 1 児童の実態に合わせた授業

個別指導計画を作成、活用するのに当たり、様々な角度から児童の実態を把握したり、授業中の行動についてより精度の高い予想をしたり、意図的計画的な指導を行ったりしたが、これらは、通常の学級に在籍する全ての児童の指導に大切な視点である。

#### 2 分かりやすい授業

授業展開の見通しをもつのが難しい児童に対し、授業の展開を事前に示したり、定型化したりして見通しをもたせることや、問題解決への見通しをもたせるために、既習事項の確認やヒントカードなどを使って支援をしたことは、通常の学級に在籍する全ての児童の指導に大切な視点である。

#### 3 児童の考え方やよさを生かす授業

ともすると自己肯定感が低くなりがちな児童に対し、積極的に賞賛したり、承認したりすること、またその児童の考え方やよさを授業に生かすことで意欲を喚起することは、通常の学級に在籍する全ての児童の指導に大切な視点である。

### IV 課題

児童に自己を統制する力を育成することである。授業においてどのような働きかけが考えられるか、追究する余地がある。

<参考文献>文部科学省2008「小・中学校におけるLD(学習障害)・ADHD(注意欠陥/多動性障害)・高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)」東洋館出版社